

壁紙が剥がれかかっている——。穏やかな日曜の朝。リビングのラジオはゆったりとした音楽を垂れ流し、妻と娘が談笑しながら温かいスープを飲み干そうとしている。これ以上ないくらい完璧な休日の朝。だが僕の眼はリビングの壁紙に釘付けになっていた。部屋の角の部分から数センチ、壁紙が剥がれかかっている。何度眼を逸らしても、気づくとめくれ上がった壁紙に視線を奪われていた。

「ねえ、聞いている？」壁紙に気を取られ話を聞いていなかった僕に、娘が語気を強めた。「また学校行きたいねって話してたの」妻が助け舟を出してくれたので、浅く頷き彼女に同意する。娘の学校が休校になって半年、四六時中家族と過ごす生活にも慣れてきた。この生活もあと一ヶ月で終わってしまうのだと思うと、尚更、壁紙のことが気にかかってしまう。あの壁紙の数センチの隙間から、私たちの時間の終わりが始まってしまふような気がした。

窓の外は十二月らしからぬ陽気で、生ぬるい風の中に鳥の鳴き声も聞こえてくる。家の前の道も人通りがいつもより多い。この頃は外出は必要最低限に控えているのだが、少し外を歩いてみたくなった。我が家から少し歩いたところにホームセンターがある。今日は壁紙を貼り直す道具を買いに行く日しよう。玄関で上着をはおり靴紐を結んでみると、外出の気配を察知したのか、娘も上着をはおり始めた。「今日は散歩の日じゃないよ」と言っても娘は靴紐を結ぶ手を止めない。助けを求め妻を見ると、彼女も上着をはおっているところだった。僕は諦め、気休めだが、護身のため丈夫な傘を持つていくことにした。三人で散歩するのなんていつぶりだろう。犬と散歩する人や家族連れで歩く人たちとすれ違うたび、少しずつ警戒心が解け、傘を握る手も緩んでいった。もはや、晴れた日に傘を持ち歩いていることが、少し気恥ずかしくさえ思えてきた。「娘が最近友達とビデオ通話で話したこと」「材料が揃えば食べたい料理」「妻がネットで購入したワンピースが全然届かないこと」などを話しながら歩く内に、あつという間にホームセンターへ辿り着いた。

壁紙を貼り直すためのノリやハケ、タケベラなんかを調達していると、興奮した様子の妻が「これ似てない？」と新品の壁紙を持ってきた。「ほら、パムッカレの」と言われやつと、妻の言いたいことがわかった。

娘が生まれる前は、二人でよく海外旅行をした。白く光る石灰の棚田を見たくてトルコ西部の街・パムッカレへ行ったのが、最後の海外旅行だ。僕らはパムッカレがとても気に入ったのでしばらくの間滞在したのだが、妻がいま手にしている壁紙は、その時泊まっていたホテルの壁紙にそっくりだったのだ。「あと一ヶ月しかないのに？」と聞くと「まだ一ヶ月もあるからね。もうトルコも行けないだろうし」とニコニコしながら妻は壁紙を買い物かこの中へ押し込んだ。誰もいないレジへ行き、商品代金をレジ台の上に置く。同じように代金を置いていったお客さん達の硬貨が積み上がっていて、レジ台は神社の境内のようになっていた。

僕らが商品を袋に詰めようとしていると、助けを求める娘の声が聞こえてきた。娘はレジ奥のバックヤードに立っついていて、その傍に若い男が倒れていた。妻が娘を抱え上げ、僕は倒れている男に駆け寄る。幸い男は呼吸を続けており、近くのクッションを敷き詰めそこに寝かすにつけ、意識が戻るまであいだ介抱してやった。彼は配達途中で誰かに襲われてしまったらしい。彼が倒れていたあたりに散らばっていた荷物を少し整理してやる。ふと、彼の届け損ねた荷物の中に自分の家の住所を見つけ、妻に声をかける。「ワンピース、届いたよ」

日が暮れる前に坂道を上り帰路につく。帰宅次第、娘と壁紙を貼り直す準備を始める。前の壁紙を元氣よく剥がしながら「やつぱり学校いきたいなあ」と娘がはやく。「ま、一ヶ月だけなんだけどね」と壁にノリを貼る娘に「まだ一ヶ月もあるからね」と答え、僕は黙々と壁紙を貼り始めた。時間はあつという間に過ぎ、今日も巨大な夕日が沈んでいく。「暑いねー」と娘が上着を脱ぐ。「パパが子供の頃見た夕日はもつとちっちゃくて、この十分の一くらいの大きさだったんだよ」と伝えると「じゃあ、今の夕日の方が綺麗だね」というので、そうだね、と返した。

ラジオのニュース番組では、キャスターが放送終了の挨拶をしている。挨拶が終わると優雅な音楽は消え、今度はザーザーと耳障りなノイズを垂れ流し始めた。そろそろ電気も使えなくなるかもしれない。「この壁紙、やつぱりいいね」と言いながら、新しいワンピースを着た妻がリビングへやってきた。あと一ヶ月。三人でゆるやかに暮らしていくんだ。毎晩、大きく美しい夕陽を眺めながら。

## ゆるやかな片鱗

藤井颯太郎

「声の展示」朗読——今井冬菜 城野佑弥  
撮影（@豊中市内）——鈴木竜一朗

